

おわりに

いなみ野ため池ミュージアム 10 年のあゆみの中で、多くの学びと多くの出会いがありました。“ため池”に感謝。“水”の集まるところに生き物が集まり、人も集まる。その“水”は、先人が、「水一滴は血の一滴」の思いで、時と場所を越えて“ためて”“つないで”きたのです。日本一のいなみ野ため池灌漑は、水利用の“平準化”と流域変更“を可能にして出来た先人の叡智のなせる技だと思います。

しかし、ため池の歴史は順風満帆ではなかった。明治開国後、外国から安い綿が流入し、いなみ野台地の綿作の火が消えました。この外国綿糸の輸入圧力に加え、過重な地租の負担と度重なる干ばつ、この三重苦がいなみ野台地に生きる人々を苦しめました。初代加古郡長の北条直正が著した『母里村難恢復史略』とそこに描かれている播州葡萄園や御坂サイフォンとの出会いは衝撃的でした。

ところで、1960 年代、工業化・都市化の中で、目先の経済効果を求める市場経済が全面に出て、外部経済効果を持つため池は地域社会から忘れられていきました。ため池は“危険だから近づくな”との立て看板が並び、「よい子はため池で遊ばない」という風潮が醸し出されました。自然や生き物に興味をもつ子どもたちにとって、危険がわからぬいため池はとても危険な場所になってしまいました。

兵庫大学でも以前は、寺田池との境はブロック塀で完全に遮断されていました。今は逆に、寺田池と大学はデッキでつながり、地域住民、学生・教職員が自由に出入りできるようになりました。いなみ野ため池学を受講した学生は、逆にため池に近づき、危険な場所を知ることが安全につながると言い切っています。いなみ野ため池ミュージアム 10 年のあゆみの生きた成果だと思います。

しかし、3・11 東日本大震災時の原発事故を機にわが国は、これまで経験したことのない新たな段階に入りました。いわば近代文明の危機を前にして、これまでの人間中心的自然観を改め、自然とともに生きる共生社会、すなわち「ため池から発想する共生社会を創造する地域づくり」が、これから 10 年の針路となるでしょう。いなみ野ため池ミュージアムは、いよいよ本格的な地域づくりに向けて第二ステージが始まるのです。

いなみ野ため池ミュージアム運営協議会 副会長

池本廣希



